

印象 16 編 - 2022 年 4 月の総評に代えて

○ 林 桂 ○

投稿数も高止まりし、レベルも高いものが多い。ただ、書き急いでいると思われる作品も目立つ。「詩」として、この説明的な一行は必要かと思うときがしばしばある。逡巡したあげく、取らないことが多い。短い詩句である。だからこそ unnecessary、不用意な言葉を推敲して欲しいと思う。

この稿の最後に作者名と作品を照合したが、ベテランの作者が多かった。表現に瑕疵がない完成度の高さがあるからかもしれない。

● 藤田 ゆきまち ● （三重県）
贈ろうとしていた薔薇を持ち帰る

【評】伝えたい気持を何らかの理由で取りやめたのである。薔薇を贈ったの気持である。半端な思いではなかっただろう。しかし、半端な気持でないからこそ躊躇したのだろう。薔薇は自室でしばらくその思いの名残を伝えることになる。

● 百々由々 ● （岐阜県）

昔よく読んだ本を開いて
雨音を聴く

【評】「昔よく読んだ本」は、今は読んでいないことになる。「開いて」は読むのとは違う。「雨音を聴く」と合わせて、回想の時間に浸っているのだろう。過去への現実逃避の趣があるだろうか。

● レモンマートル ● （北海道）

車窓を過ぎる幼稚園に
私がいた
ひとりでも大丈夫
ひとりでもバスは乗れる

【評】「私がいた」は、過去の事実の指摘か、現実にも（幻想的に）見えたのか。
三行目、四行目は、過去の「私」と現在の「私」が入り交じって揺れているようだ。

● 奎いう子 ● （佐賀県）

透明なボールペン軸春四番

【評】透明なボールペン軸は、インクの消費量を見るためのアイデアだが、作者が見つめている「透明」は違った意味を

帯びている。孤独な視線の先にあるもののようだ。

● ヒラノユリア ● （神奈川県）

笑顔にならない鏡を
見つめている

【評】「笑顔にならない」と、自分の表情を他者性のもとに描く。ここでの鏡の「自分」は他者なのだ。

● 杉野 祐子 ● （愛媛県）

転勤の部屋を照らしているミモザ

【評】ミモザの花の明るさ。転勤で新たに住むことになった部屋のよそよそしさを、僅かに慰めてくれている。

● 小林紅石 ● （埼玉県）

絶滅しゆく麒麟の長い脚を
君は日が沈むまで眺めてる

【評】思えば、動物園の動物は、麒麟も含めて絶滅危惧種の展示のようなものだ。麒麟と言えば、長い首がまず第一の特徴だが、脚も長い。視線が首に向かわないで、脚に向かっていてところに

「君」らしさがある。上に向かないで下
に向く視線の「君」。

● 藤田 ゆきまち ● （三重県）

泣かないで
はんぶんあげるからバナナ

【評】 バナナでなくても、幼児期には誰
もが一度は経験していそうな場面。「は
んぶん」が、今から思えばいとおしい判
断だ。

● まちりこ ● （埼玉県）

音読をした時に知る
悲しみの
余韻のような自己肯定感

【評】 意識して自分の声を聞くという行
為。音読もそうだ。その不思議な感覚
を、三行目はよく伝えている。

● まちりこ ● （埼玉県）

悲しみに折り合いをつける
折り鶴の頭を
とっちにしようか悩む

【評】 折り鶴の最後の仕上げで、どちら

を頭として折りまげるかは、決まっていない。それは一行目の感覚と通うというのであろう。

● 奎 いう子 ● （佐賀県）

退職のブーケの蕾だった薔薇

【評】退職祝いに貰ったブーケの薔薇のつぼみは、いまや開いたか散っている。退職の日を暫く過ぎた後の複雑な感覚が、薔薇を借りて言い止められている。

● 霧島 春 ● （愛知県）

夕暮れといちごの箱を
平行にしたまま帰る行為の名前

【評】「夕暮れといちごの箱を／平行にしたまま帰る行為」を意識することはない。したがって、その行為に名前をつけることも、思いつくこともない。しかし、この一編は、私たちの世界は名づけられざる行為に満ちていることに気づかせてくれる。

● 藤 雪陽 ● （長野県）

簪の花芯はパール花の冷え

【評】花かんざしの中心に埋められた真珠。花冷えの中を和装に着飾った女性の美しい１ショットだろう。簪の一点に絞った表現が効果的。

● 宇井麻千 ●（大阪府）

納骨を終えて小雨が降る町に
いつか知らない赤い実になる

【評】「いつか知らない赤い実になる」には、作者の心の中で、この町が遠いものになってゆく思いが描かれているようだ。おそらく縁者が元気なころは、頻繁に訪れていただろう町が、静かに遠い存在になってゆく。

● 杉野 祐子 ●（愛媛県）

狐火を見に行く黒髪を束ね

【評】狐火は見ようとして見られるものでもない。見てしまったというようにして目撃者になるものだろう。黒髪を束ねてまで、敢えてそれを見に行く決意の意味は何か。

● 長谷川 柊香 ●（宮城県）

焼釜にナン貼りつける開戦日

【評】開戦日は、俳句の季語立てでは、一般に太平洋戦争の12月8日を言うが、ここでの開戦日は、ロシアのウクライナ侵攻を言っているものと思われる。焼き釜の壁に貼り付けて焼かれるナンとのモニタージュ。